おわりに

アジア経済研究所のアフリカ研究を検討するにあたって，『アフリカⅠ』では三つの問題群に，『アフリカⅡ』では五つの問題群に絞って，その各々の内容を吟味してきた。この八つの問題群の選び方は，ある程度アフリカ研究者間の討議を経たものとはいえ，かなり本書の編者個人の考えを基にして選んである。アジア経済研究所の研究会が，このような問題群のまとめ方で編成されたというわけではないし，日本で一般にアフリカ研究をこのように分けて研究しているわけでもない。『アフリカⅠ』の総論の「はじめに」で述べたように，アフリカの地域研究を，対象地域の範囲を小さく限ったミクロの主題と，地域の分析範囲を広くとったマクロの主題とにまず分け，その二つの各々について，研究の課題を将来にわたって展望できるように問題群を設定した結果，このような選び方となったのである。

日本における他のアフリカ研究機関は，文化人類学者が多数を占めることもあずかって，ミクロの主題を追求している場合が圧倒的に多い。これに対し，アジア経済研究所のアフリカ研究は，マクロの主題を追求しているところに特徴があり，継続的に30年以上にわたって研究してきた。地域研究という場合，アフリカ研究の中で，世界の他の地域と比較して際立った特徴を示すのはミクロの主題であるが，アジア経済研究所のアフリカ研究は，この主題に関しても見るべき成果をあげてきたといえる。その特徴は，ミクロ主題を扱いながらも，より広いマクロの問題と常にかかわらせながら分析してきたことにあるといってもよいであろう。ただアフリカ研究発足当時にみられた文化人類学者との研究上の対話は，時がたつに従って少なくなっていった。地域研究としての総合性を目ざすためには，もう少し文化，宗教，社会的行為などの主題を正面から扱っているアフリカ研究者との研究交流があってよいはずである。

アフリカの地域研究を，マクロとミクロという二分法で切ってみたが，これはもちろんその中間の視野を持つことを排除するものではない。しかし分析の対象範囲が異なることによって見えるものが違ってくるという論点を明確にするために，二分法を使うことにした。地域研究という，すぐれて空間的な境位を問題の中軸にすえる考え方は，その範囲のとり方が，分析の目的そのものを決定づけてしまうほど重要であることを認識しなけばならない。

アフリカにおいて，ミクロとマクロを区別するという視点が他の地域に増して必要であると考えた理由は，前に述べたとおり，それがかなりの程度，アフリカ固有の「生存維持経済」に焦点を合わせるか，それとも外来の資本主義的な経済の浸透の方に焦点を合わせるか，を決定してしまうことに気がついたからである。そして総合的な地域研究には，ミクロとマクロの双方の複眼的理解を必要とするが，地域研究者としての資質を問われるのは，より長い年月をかけ，対象への集中力を要求されるミクロの研究においてであろう。

本総論で生産様式の「接合理論」にふれたのも，ミクロとマクロの双方の問題を総合的に理解する必要を強調したかったためである。そして「接合」をみる場合，資本主義生産様式の執行者が自らの利益に基づいて「生存維持的」生産様式を温存すると，一義的に理解するのではなく，両者の対抗関係を文化の側面をも含んだものとしてとらえ，現代の世界を異なる方向の力が複合的に作用しているアリーナとしてみる必要があることを指摘しておきたい。